

2015年1月11日

「経友」原稿

## 宇沢弘文先生を偲ぶブルース

松島齊

東京大学大学院経済学研究科教授

ゼミの学生だったころの宇沢弘文先生とほぼ同じ年になった私は、昨年ひさしぶりに松島ゼミを再開した。どうやら以前よりはずいぶん、私はゼミ生ひとりひとりをよく観察できる。「あのころの宇沢先生には、我々はさぞかし幼く見えていたんだらうなあ。」

9月24日から26日にかけては、伊豆諸島の神津島でゼミ合宿をした。夕食時、私はみんなにひとしきり宇沢ゼミの経験話を話した。もともと、話の大半は他愛ないことばかり。こうして悦に入っている私は、ほんとずっと宇沢先生にとりつかれたままなんだなあ、我ながらつくづくそう思い、苦笑いした。

しかし25日の晩、宿舎の部屋でテレビをつけると、宇沢先生が亡くなったと報道が飛び込んできた。とにかくこの詳細を確かめねば。そう思うものの私は、「脱ネット依存」と称して、なんら通信手段をもたずに出てきてしまった。学生にスマホをかりるのもはばかれると思っていたら、どうやら一週間も前にすでに亡くなられていたとのこと。ゼミ生には宇沢先生が他界されたと告げ、悶々としたまま翌日竹芝栈橋に到着するや、そのまま解散となった。

アイパッドと携帯ワイファイは持参していたので（神津島に電波は届かない）、さっそく新橋の改札口でネットを開くと、ゼミの6年先輩でいろいろお世話になっている慶応大学ビジネススクールの姉川知史さんからのメールを発見。やはりテレビの報道で初めて知ったようで、とても動揺されているご様子。つ

まり私と同じ気分でいらっしゃることを確認した。姉川さんは、見ていて気の毒になるほど、宇沢先生を慕っているのだ。

滋賀大学経済学部の井手一郎さんから同じようなメールが届く。井手さんは、ゼミ生時にはヴェブレンのことを研究されていた。実直でありながら宇沢先生のユーモアを解される、私がとても信頼している一年上の先輩。宇沢先生を偲ぶ催しや、追悼コンファレンスなどが開かれることを切望されているご様子だった。

東京大学経済学研究科からメールが来るのはそれより後だった。率直に言うと私は、自分が大学院生のころから、宇沢先生が経済学から離れていってしまった、という危惧が晴れずにいた。お亡くなりになった時にそのことを実感するのがつらいと、心の片隅でいつもそう思っていたのだ。

しかし幸いにも、11月16日には神田の学士会館で「宇沢先生を偲ぶ会」が開かれ、ゆかりの方が大勢で、すばらしい集いになった。スクリーンでは、経済学者としての宇沢先生が、海外の教え子や同僚の方のお話を通じて、印象的に紹介され、それはとても有意義だった。

中でも、ジョージ・アカロフ教授（カリフォルニア大学バークレー校）は、ある宇沢先生の論文から強いインスピレーションを受けたと話された。1969年に *Journal of Political Economy* に掲載された「ペンローズ効果」のことではなかろうか。

アカロフは、ノーベル賞授賞作である「レモン（中古車）市場」についての論文を、1970年に *Quarterly Journal of Economics* に発表。当時としては斬新な内容だったため、なかなか専門誌に採択されなかったらしい。この研究は、「新古典派経済学」と同じ、既存の分析枠組みを使って、今まで説明できなかった様々な経済制度を解明する、画期的なアプローチだ。

一方、「レモン」の前年に *Journal of Political Economy* に掲載された宇沢先生の「ペンローズ効果」も、既存の新古典派モデルに、それまでは考慮されなかった、投資決定に調整費用がかかるとする条件を導入して、伝統的な仕方と同

じように投資決定の仕組みを分析してみせた。このように、双方の論文には相通じるものがある。

アカロフが「ペンローズ効果」のことを指していたかどうかは定かでないが、文Ⅱ生のころ、完全競争のモデルが好きになれなかった私は、宇沢先生が日本語で書かれたペンローズ効果のモデルに出会い、やはりとても興味深く読んだことを思い出した。そして、その後、アカロフのレモンに魅せられたのがきっかけで、私は研究者になることを決めたのだ。

私は、宇沢ゼミ出身であるものの、先生の専門である数理経済学、経済成長論、マクロ経済学、それに公害や三里塚といった社会活動のいずれにも、直接には関係しないキャリアを積んできた。にもかかわらず、私はどうやら、宇沢先生から誰よりも強い影響を受けて今までやってきたように思う。しかもそのことを私自身よく自己分析できている。そこで、偲ぶ会にも参加されていた日本評論社の小西ふき子さんに、「宇沢先生の追悼文を少し長めに書きたいから協力してほしい」とお願いしてみた。

学部生時、宇沢先生は絶対的存在として立ちはだかっていた。今思えば、私は、研究者としての活路を見出すため、宇沢先生と経済学を相手に格闘していたのだ。このことをうまく書けば、宇沢先生の研究者および教育者としての側面を後世に伝えることができるんじゃないか。弟子として、このようなことをするのは責務であろう。しかし、こんなことを平気でできるのは、私しかない。

日本評論社の隔月誌「経済セミナー」で、私は「オークションとマーケットデザイン」というタイトルの連載を、かれこれ2年間続けている。ならば、その一回分を、宇沢先生について書く、ということにしたらどうか。というわけで、ではそうしましょう、と相成った。「経済セミナー2, 3月号」に掲載されるので、ぜひご覧いただきたい。

そうとはいえ、宇沢先生との思い出は、多くて書きつくせない。以下には、経済セミナーに書かなかった、ちょっとブルーなエピソードを、追悼の意を込めてお話ししよう。

私が大学院に進学して間もなくであったろうか。記憶が定かでないが、ある時、宇沢先生は私に、「いっしょに医療経済学をやりなさい」と、唐突に切り出した。「いったいなぜ？」

私は、父方も母方も、医者が多い家系に生まれ、兄も医者になった。私自身も、小学校低学年までは医者にあこがれていて、小学一年時には将来、北里柴三郎（か、それがだめなら岡本太郎）のようになりたい、と希望していたようだ。しかしその後、血をみたり、切ったりするのは極端に苦手であることに気が付き、断念した。それを知ってか知らずか、宇沢先生は、私をお供に病院見学に2度出かけた。

一度目は、大田区の地域密着型の、とある総合病院。病院長の長めのお話のせいで不覚にもうつらうつらしてしまい、すると急に「百聞は一見にしかず」と、痔の手術を見学しろというはめになった。私は手術室の隅で直立不動。目の前5メートル先では大きめのイボ痔にメスがスウッと、入り込んだとたんにふらふらっと、「もう駄目です」。あとで宇沢先生が「きみには医者は無理ね」。

二度目は、場所など一切合切忘れてしまったが、入院施設のある精神科の病院。これは実はとても興味深い経験だった。やや重度の患者さんにも、その方にふさわしい生活環境をていねいにデザインすることによって、病院内ではあるが、社会生活ができるようにしようというのが、この診療所のねらいだ。

我々が病棟に入ると、入院されている方々は次第に、宇沢先生のまわりに集まるようになった。それから、なんとなくリラックスした雰囲気が続き、その間宇沢先生は腰かけてじっとしていらした。宇沢先生は、白ひげならぬ、赤ひげ先生だ。私はここで、ふと違和感を感じた。この病院は、医者の存在が外からわからないほど消された、「赤ひげのいない」病院だったからだ。

幾度か、宇沢先生からは、「自分は医者になりたかった」ということをお聞きしていた。しかし「ヒポクラテスの誓い」を読んで、とてもこのような聖人を貫けないと断念して、結局経済学者になってしまった、と。

宇沢先生は、ヒポクラテスや赤ひげのような、家父長的温情主義、つまりパターナリズム、はとても大事なことである。パターナリズムは、合理的選択

だけを重視する立場からは守られなければならないことである。経済学はいうまでもなく後者の立場である、と。どうやらそう考えていらっしやる。しかし、この病院は、宇沢先生の意に反して、ヒポクラテスのようなパターンリズムではない、もっと別のアプローチを模索しているのだ。私はこのように即断した。

私は、赤ひげのいない病院づくりに共感するも、以後宇沢先生との病院めぐりはもう続けなかった。

私は、この時愚かな判断をした、と今思っている。あの当時、私はいかにも宇沢先生を評論しようとして、宇沢先生はパターンリストだと言い放ち、結局この言い分を自分の逃げ口上にした、というわけだ。本当は、右も左もわからぬ大学院生にとって、病院のことは手におえない、というのが本音だったのだ。

許される限り宇沢先生にもっとお供すべきだった。もっと具体的な医療現場を見る機会に接すべきだった。さらには、少しでも宇沢先生のお手伝いできればよかった。私はいまさらながら後悔している。